東石松先人録

日野俊子（92 歳）

明治 29 年（1896 年）1 月 8 日生

　川西桑屋日野要の次女に生まれ、大正４年大分高等女学校、同１０年東京女子医学専門学校を卒業し女医となる。東京浜田病院に勤務後、大正１４年郷里由布院に帰り家業を継いで日野病院長となる。

以来、交通不便の折から徒歩やカゴ、時には牛馬に乗って医療活動に従事。近隣の村はもとより現在の九重町や別府市にまで往診し、「医は仁術」を実践する。また、看護婦や助産婦の育成指導に自費を投じて尽力し、へき地医療と保健指導に大なる功績を残す。
その間、昭和３５年から町議会議員、また副議長として行政にも貢献した。

昭和３９年、川西より川南に日野病院を新築移転し、長男副之介氏に院長を譲り、自らは副院長として勤めた。
以後、川西地区が無医村となったが、村民の要望により８２歳の高齢まで旧日野病院内で出張診療にあたる。

昭和５３年に湯布院町名誉町民に。国際女医学会賞（同４９年）、日本女医会賞、読売医療功労賞、県知事賞（同５０年）、大鶴医師会賞、勲五等宝冠章をそれぞれ受章する。

【町誌　湯布院〈別巻〉より転記】

旧日野病院本館（川西）は、平成 11 年（1999 年）に国指定重要文化財に登録された。

明治 27 年（1894 年）の上棟。二階建，寄棟造，桟瓦葺で，外壁に石造建築の意匠を採り入れ，洋風の玄関ポーチを設けるなど，地方における擬洋風建築として知られている。本館東側の病棟は病室部を寄棟造・二階建とし，各所に繊細な和風意匠がうかがわれる。

旧日野医院は，明治時代中期に建てられた本館と病棟が揃って残り，全国的にも類例が少なく，近代医学黎明期の歴史を知るうえで重要である。